「読むこと」の再生

横浜市立六角橋中学校教諭　飯田（いいだ）　秀治（ひではる）

週三時間、これがわたしに与えられた国語の時間です。持ち時間数の関係で、一年を国語三、書写一と分けたからです。絶対的に時間数が足りません。（母語の学習に関わる時間数の削減は、亡国的というか、民族が滅びるほどの暴挙であると、嘆かざるを得ません。）

時間数が四分の三にカットされたのですから、「読むこと」にも変質が求められました。それは、不況のあおりで、給与（国語の時間数）が削られ、食費（読むこと）の切り詰めをしなければならない我が家の現状に似ています。住宅費（書くこと）、教育費（話すこと・聞くこと）の出費があります。しかし、健康・安全を考えると、食費は安易に縮少できません。今までにない工夫が、食費（読むこと）に必要になります。そのやりくりのいくつかを、「読むこと」の再生の願いを込めて書いてみます。

「読むこと」と「書くこと」の間に「写文」がある

わたしは、自分にとっては、学校の仕事の中で、言葉によって子どもを育てることがなにより大事だと思っています。ですから、国語（日本語）の授業を大切に扱っているのですが、「今年の一年は、聞く力がついていない。」「こちらの言葉が入っていかない。」など、厳しい指摘がなされ、生徒指導上の問題も、例年より質量ともに深刻でした。しかも、言葉を育てる国語は時間減です。

そこで、十月中ごろから、朝学活の五分をもらい、学年一斉で「五分間写文」をすることにしました。「写文」とは（これはわたしの作った言葉ですが）、文字通り「文を写す」ことです。百字から百五十字程度で書き写して味わえる優れた文章を教師側が用意し、それをノートに「写文」するのです。

そのうえ、授業の中でも意識して「写文」を取り入れました。例えば、巧みな比喩（ひゆ）が使われている文章は、以前なら読みながら傍線を引いて終わっていましたが、「写文」してもらいました。詩集を読んだときも、気に入ったものを選び、読んだ後、全文を「写文」してから、選んだ理由を書いてもらいます。古典でも、故事成語の「矛盾」は「楚人に」からの全文を、平家物語では「扇の的」の一部分を原文で「写文」です。今までどおり、音読したり暗唱したりするのですが、なにげなく読んでいたことに、「写文」で気がついたと、学習者からの反応も上々です。

と同時に、言葉一つ一つに敏感になり、いつのまにか、「先生の話を注意深く聞ける。」「先生の話の意味が今までよりよくわかる。」と、国語以外の場面にも、その効果は上がってきています。

書物以外の読み物を読む

一年生の十一月ごろになると、すっかり中学校生活に慣れ、人間関係も一応落ち着きます。その反面、入学当初にあった志がぼんやりしてきます。

そこで、この時機に初心に戻り、自分を見つめ、固定化された人間関係を作り直すねらいから、「自分の取り扱い説明書」と称し、自分は実はこんな人だ、こうなりたいという自己紹介を試みました。この活動は、「話すこと・聞くこと」に収束されるのですが、途中に、スピーチする材料を集めてまとめる、構成を考える、メモを作る、という「書くこと」の活動を入れます。その導入として、「薬の取り扱い説明書」を読み解いてみました。使用目的が違う四つの薬の取り扱い説明書を、読み比べたり、共通している項目を見つけたりしました。必要な情報をいかに収集できるかがねらいです。そこで学んだ情報発信の仕方と、一年の教科書の四十二ページに出ているようなマッピング（ウエビング）を使い、スピーチに仕上げ、個性豊かな発表を楽しく聞き合いました。これは、どんなことをどんなふうに考えたり、まとめたり、発表したりすればいいかという、学習の方法がしっかりわかっていたから積極的にできたと考えます。「薬の取り扱い説明書」を読むことで、その方法を実際に試すことができたのではないでしょうか。

「薬の取り扱い説明書」という身近なものが、情報の発信物として、いかに工夫されているか、学習者はかなり驚いていました。書物だけが読む物ではありません。得るものはそれぞれ違います。しかし、違うからこそ、読む力がバランスよく育つのではないかと思います。

強弱の変化をつけた読み

走るときは、漫然と走るのではなく、インターバルを入れると効果的であることは、よく知られています。

その「間」を入れるとか「強弱」の変化をつけることを「読むこと」にも取り入れたらどうでしょうか。

通読を意識した読みと、ある部分をほぐすような読みを意識的に使い分けたらどうかと、考えるようになりました。

例えば、通読を意識した読みでは、少し速めに、さっさと読み進めてもらう。その際、気になるところに傍線を引いたり、付せんを入れたりしてもよいが、意味や漢字がわからなくてもとばして、全体が何について書いてあるかおおまかにつかみなさい、と言う。どうしてもその言葉や漢字がわからないと読み進めないなら、先生にききなさい、と言う。(教師の介入はこれくらいにします。)読み終えて、つかんだことをおおまかに書いてもよいし、大事な部分を書き写してもよいとして、活動を重ねます。

反対に、ほぐすような読みでは「写文」を入れ、話し合いを入れ、自分の言葉でまとめるまでが「読むこと」とします。その中には、詳細な読解も必要ですし、教師の説明も入れなければならないときがあるでしょう。ただ、これは、時間の制約もあり、いつもできるやり方ではありません。だが、「読むこと」が想像することであり、考えることだとすると、意図的にこういう場面を確保しなければならないと思います。

この二つ違った読みを、どの教材で、どのようにメリハリをつけてやるか。国語教師としての腕のみせどころではないでしょうか。

ポッキリ教材を使ったポッキリ授業

週一時間減っただけなのに、やりにくいことがいくつも起こりました。その一つが、翌週にまたがる読みの難しさです。今日火曜日で、前回が先週金曜日となると小説教材はお手上げになることもあります。そこで、一回の授業で「読むこと」が完結する教材を用意して、読む力を育てようと考えました。

難易度もありますが、字数が千二百~千八百程度の読み物を用意します。(B五判一枚に納められるくらいを目安にしてもよいと思います。)そして、読む前に知っていたこと、本文の要約、読んだ後にわかったことの三つの視点から、思ったことを書いて、時間内に提出してもらいます。次の授業までに教師が目を通し、赤線やひと言コメントを入れて返却します。コメントは書いた本人を意識し、一箇所はほめるつもりで書き添えます。このやり方は、「読む力」がわかることもありますが、子どもとの人間関係を作るのには効果満点です。医者が行う問診のつもりですることが肝要だと思っています。といっても、子どもの書いたものを読むのは、時間・労力ともに大変です。そこで、ひと工夫。子どもが読んで、書いている間に、前のクラスを処理するのです。必ず、次の時間に返却すること。溜めたら、このポッキリ授業はうまくいきません。子どもの作品が色あせて、やがて発酵していきます。



写文について

「朝の写文」は、生活指導の必要性から生まれました。ですから、ねらいの一つは、「落ち着いた雰囲気の中で、一日を始めよう」ということです。しかし、もう一つ重要な国語的ねらいがあります。それは、「言葉の獲得」です。生徒たちに、良質な日本語と出会い、感じる力・考える力・表す力を向上させてほしいという願いが込められています。

その実施に向けては、次のようにしました。

・写す文章は教師が用意し、拡大コピーしたものを黒板にはる。

・専用のノートを用意し、折りをみて、担任がチェックしたり、ひと言書いたりする。

・朝の始業のチャイムとともにすぐ始める。

そして、手順を説明した生徒への文章の中で、『写文』のとき大事なこと……文字には意味が隠されています。書きながら、その隠された意味を見つけ出すつもりで写してください。」と呼びかけました。

(ありがたいことに、我が校では今年度から「朝の十分間写文」が可能になりました。「写文」についてご質問がありましたら、六角橋中学校 ☎045-481-3521・飯田までご連絡ください。)